［成果情報名］無側枝性秋ギク「晃花の富士」における腋芽確保のためのベンジルアミノプリンの処理方法

［要約］無側枝性秋ギク「晃花の富士」においては、採穂用の親株を定植する５月上旬からＢＡを処理する必要がある。

［キーワード］秋ギク、晃花の富士、腋芽、ベンジルアミノプリン

［担当］総合農林試験場・作物園芸部・花き科
［連絡先］電話（代表）0957-26-3330　（直通）0957-26-4319

［区分］花き

［分類］普及

［背景・ねらい］

秋ギクは、一般的に 10 月から翌年の 5 月まで出荷され、そこで使用される穂を確保するための親株を 5 月に定植する。

ほとんどの秋ギク品種は、高温となる 8 月に腋芽が消失しやすくなるが、穂の確保には影響がない。

しかし、無側枝性である「晃花の富士」は、腋芽が消失しやすく、7 月や 8 月よりも早い時期から消失しており、穂の確保が困難となっている。

そこで、これまでの試験で、腋芽形成効果が確認されているベンジルアミノプリン（以下ＢＡ）を用いて、無側枝性秋ギク「晃花の富士」におけるＢＡの処理開始時期を検討する。

［成果の内容・特徴］

１．「晃花の富士」において、摘芯後にＢＡ 7.5ppm を 10a 当たり 100 リットル散布すると、伸長してくる側技の葉腋に腋芽が形成される（表 1）。

２．「晃花の富士」において、4 月下旬に摘芯した株で、すでに腋芽の消失が始まっている（表 1）ため、採穂用の親株を定植する 5 月上旬からＢＡを処理する必要がある。

［具体的データ］

表１　「晃花の富士」における時期別のＢＡ処理効果

摘芯日	処理方法	平均節数（個）	平均腋芽形成数（個）	腋芽形成率（％）	25日間平均温室内温度（℃）
4月20日	ＢＡ	7.7	7.3	94.6	22.1
	無処理	7.8	5.8	74.0	
4月30日	ＢＡ	8.7	7.9	89.9	22.8
	無処理	10.6	5.9	55.9	
5月10日	ＢＡ	8.5	8.2	96.4	23.9
	無処理	9.7	6.5	66.4	
5月20日	ＢＡ	10.9	9.7	89.5	24.5
	無処理	10.0	3.3	32.8	
5月30日	ＢＡ	7.7	6.5	84.0	24.9
	無処理	8.3	2.8	33.5	
6月11日	ＢＡ	8.5	7.5	88.5	26.2
	無処理	8.1	3.3	40.8	
6月20日	ＢＡ	8.2	7.2	87.8	27.0
	無処理	8.3	1.3	16.2	
7月2日	ＢＡ	8.3	7.9	94.4	27.6
	無処理	9.2	0.8	9.2	

注１）ガラス温室（コンクリート隔離ベンチ）で試験した。
注２）定植　　2007 年 4 月 17 日から約 10 日間隔で 6 月 28 日まで
注３）摘心　　各定植日から約 3 日後　枝整理なし
注４）BA 処理方法
　（１）処理濃度　　7.5ppm（商品名：「ビーエー液剤」4000 倍）
　（２）処理量　　　10a 当たり 100 リットルを葉面散布（ハンドスプレー使用）
　（３）処理時期　　摘心日と同日
注５）調査方法
　（１）調査日　　BA 処理日から 25 日目
　（２）調査項目　節数、腋芽数、腋芽形成率
　（３）調査本数　7cm 以上の枝すべて

［その他］
研究課題名：無側枝性秋ギク「晃花の富士」の栽培技術確立
予算区分：県単
研究期間：2006 ～ 2008 年度
研究担当者：峯大樹、諸岡淳司